



## ベイシック・フロイト

出版社	岩崎学術出版社
著者	M.カーン
監修	妙木 浩之
翻訳	秋田 恭子 清水 めぐみ
出版年月日	2017/11/09
ISBN	9784753311262
判型・ページ数	A5・232 ページ
定価	3,300 円 (税込)

カーン著『ベイシック・フロイト – 21世紀に活かす精神分析の思考 –』のご紹介  
国大 16回 清水めぐみ

フロイト、と聞いて、みなさんは何を思い浮かべられるでしょうか。『精神分析入門』『夢判断』など、文庫版で出版されているスタンダードな著作には目を通してみるものの思いのほか難解で、ぜんぜん「入門」ではないではないか、と大学生時代の私自身は思っておりました。心理臨床では、現代に至るまでその礎となっているフロイトによる精神分析について学ぶことは必須です。しかし、今から 100 年ほど前に創案された理論は、当然のことながら今やどこか馴染みのないものになっているようでもあります。

現代では、人の心を生物としての「ヒト」という視点から扱うことが多くなり、「ヒト」は解明可能で、操作可能な存在としてみなされがちです。そういったことが可能であれば、いかようにも理想に近づかせられそうなものですが、苦悩も悲劇もなくすることができないのは昨今の世界情勢でも明らかです。世界情勢はおろか、一人ひとりの人間も「なりたい自分になる」など、できるはずもないのです。

なんとままならないことか、という思いはフロイトの活躍していた 19 世紀の終わりにも顕著だったようです。科学技術が進歩して、それまでは不可能なことがどんどん可能になったからこそ一層どうにもならないことに人は悩むようになったのかもしれませんが。こういったことは現代にもそっくりそのまま当てはまるように思われます。

本書は、自身が精神分析家であるマイケル・カーンによって 21 世紀に入ってから著された本です。一人ひとりの患者さんとていねいに関わり、表側だけではないその内奥に動く心に着目して考え続けていたフロイトのあり方は、精神分析家はもちろん心理臨床に携わる者の胸を熱くし、背筋を伸ばさせます。現代においても精神分析の理論や姿勢は、広く心理臨床に活かされており、本書に挙げられている例からは、フロイトの着想をヒントに目の前の患者さんの心の動きを理解していく営みの妙が伝わってきます。本書は、世界中の心理臨床を学ぶ大学院生が手に取っているという Williams, N. の Psychoanalytic Diagnosis 2<sup>nd</sup> ed. に「精神分析的な考え方の中核に関する読み手にやさしい本」であるとして「さらに読むとよい本」で推薦されており、日本の大学院生のために訳出されました。心理臨床にご興味のある方はぜひ手に取ってみてください。